

『小夜の中山を往く芭蕉』

立松和宏

旧東海道は菊川・日坂宿の間に『小夜の中山』という名所がある。古来より鈴鹿・箱根と共に難所として知られ、牧之原台地上の尾根道を行く結構な坂もある峠越えの道である。

地名の呼び方について「さよの中山」なのか「さやの中山」なのか両説あるが、江戸時代刊行の『東海道名所図会』の中では、「宗久が『都のつと』という書に、さやの中山にもなりぬ。ここをさよの中山という両説あり。中納言師仲公、当国の任にて下りたまひける時、土民はさよの中山と申し侍りけるとて、中古の先達などもさように読まれて侍る。また源三位頼政はさよの長山とぞ申しける。このたび老翁に尋ね侍りしかば、さやの中山と答え侍りき、云々。またある翁がいわく、夜のこころを読まざるには さやという、とかたりき。按るに、この山、遠江国佐野郡なり。さや、と、さよ、は五音相通なり。この例ま々多しと、ある。尚、現在の地名では、「静岡県掛川市佐夜鹿」である。

小夜の中山は、古来和歌に多く詠まれた名所でもあった。「小夜の中山公園」には、平安・鎌倉の昔から近世迄詠み続けられて来た四十三もの歌が碑に刻まれている。中でも紀友則、西行、阿仏尼などが名高い西行は、小夜の中山で「年たけて又越ゆべきと思いきや命なりけりさよの中山」と京よりの二度目の旅の途上で詠んだという。この歌を下敷きにして芭蕉が詠んだ「命なりわずかの笠の下涼み」という句が「涼み松公園」に句碑となっている。

私達が、旧東海道を徒歩で歩き繋ぐ旅の途次この小夜の中山を訪れたのは、平成二十一年九月二十一日のことでした。残暑厳しい中、汗をかきつつ峠を越え、道々の歌碑・句碑に往事を偲び、乏しい詩心を刺激され俳句もどきを捻ってみたりしたのである。なかなか出来ない句作に苦労したこと、汗をかき乍らの道中だったなあ、という想いを小夜の中山を旅した芭蕉の姿に重ね、漸く次の駄句ができたのだった。

〈桃青も 汗滴るか 小夜の中山〉

芭蕉という人は若い頃、桃青と名乗っていた、と微かに覚えていましたので、ちょっと気取って 桃青という文字を使ってみた、というお恥ずかしい句です。

旅を終えて街道筋を振りかえってみると、そこには実に沢山芭蕉の句碑があった。小夜の中山のあたりだけで三本もあったし、資料によれば東海道筋だけで四十四本もあると判って来た。句碑の由来も様々だ。

芭蕉の句碑を調べてゆくうちに、(ところで芭蕉は一体何度街道を行き来したのだろうか? いつ・誰と・どんな姿で・どんな想いで小夜の中山を越えたのだろうか? 遠州は小夜の中山峠に思いを馳せ、そこを旅往く芭蕉を、芭蕉の来し方を幻視してみたくないのである。芭蕉の文芸に関する文献 資料・研究書作品は大変に多く、その分野も多岐に亘っています。しかしながら如何せん芭蕉の人生・生活については書簡等ままに妄想の赴くまま、時空を超え、東海道は小夜の中山を往く芭蕉の姿を幻視してみたい。

【松尾甚七郎宗房 二十九歳】

寛文十二年(一六七二)仲春、この年生まれて初めて芭蕉は小夜の中山を越えて西から東へ、故郷伊賀上野から江戸への旅に出た。

彼が生まれたのは寛永二十一年(一六四四)。戦国の世が漸く納まり太平の世へと移り変わって行く頃であった。藤堂藩の拠点、伊賀上野城の城下赤坂町で元無足人(郷土。士分待遇)にして農人と左衛門の次男として生まれ、幼名金作。農人とは農作業はしない農家であり、武家の下働きとか手習い師匠とかをして暮らしを立てたという、当然貧しかった。母、梅は伊予生まれで藤堂家の血筋ともいう説がある。兄、姉に妹が二人いた。

藤堂藩は近江出身の戦国武将藤堂高虎が藩祖。生涯で七人の主君に仕えるも最後は徳川幕府にあって外様ながらも、子孫達は幕末まで生き抜いたたかな藩である。高虎は築城の名手としても知られ、今治、伏見、膳所城等の他、江戸城の縄張りをしたり上野の寛永寺の造営等でも知られた武将であった。よって土木関係には強かった。伊賀という土地は服部半蔵等忍者でも知られるが、無足人は間者のようなことも勤めさ

せられたとも云う。

幼少時に、伊賀上野城の侍大将藤堂新七郎家に出仕、その聡明さ故か、嫡子の良忠のお伽衆にとりたてられたという。何故一介の農人身分の子供が異例の取りたてられたのかについては、預けられたお寺の和尚による推挙があったのでは？ とか 母方の血筋故ではないかと諸説があるが定かではない。

藤堂新七郎家は文芸を尊ぶ風があり、主の良忠も和歌・連歌・俳諧を嗜み、俳諧は北村季吟の門人となり蝉吟と号した。金作も元服して忠左衛門となるが、文芸の才を認められ甚七郎宗房の名を貰い、主の良忠と共に季吟門下で活躍し始めた。が、宗房二十三歳の時、主、良忠が二十五歳の若さで死去。彼の人生で最初の挫折となった。旧主の死後すぐには致仕（解雇）とはならず良忠の作品の整理、俳諧の修行等を京とも行き来しながら暮らしたという。

戦国の世からまだ遠からぬこの時代、幕府と各藩の関係はいつ改易させられるかも知れないという常に緊張状態にあり、情報収集・調略による備えが欠かせなかつた。藤堂藩は幕府からの信頼厚いとは言え外様であり、藩祖以来ぬかりがなかつた。その策の一つとして間者・諜報員網の構築があつた。諜報員として諸藩の武家とか豪商達と連句の会を通じて堂々と交際できる俳諧師は実に適役であつた。諸国を旅する傀儡師、旅芸人、僧侶、絵師等もそんな役割を担わされたこともあつた。宗房はそんな俳諧師を養成するという藩の企みの中で生かされたのかも知れない。この間、内縁の妻寿貞が身の廻りの世話を始めたとも。いづれにしろ間に包まれた六年間が過ぎたのだった。

寛文十二年、伊賀上野天満宮に発句合わせ『貝おほひ』を奉納。作風は師の季吟もその流れにあつた貞門風。その草稿を懐に当時の新興都市江戸で俳諧師として身を立てるべく郷里を後にした。季節は仲春、松尾甚七郎宗房として武家奉公姿であつた。北村季吟の門下生仲間でもあつた久居藤堂藩江戸留守居役 向井六太夫の息子八太夫、俳号は〈朴宅〉の一行に同行。江戸日本橋の町名主小澤太郎兵衛〈朴石〉も一緒であつたとも。江戸に着いた後は日本橋小田原町に住み俳諧師としての道を歩み始めた。この消息の背景にも藤堂藩による江戸における情報収集・探索活動という大きな影が見える。単に一旗揚げようとい野心だけではなく、上京の為の資金、人材の紹介等のバックアップがありえたのではなからうか。

俳諧師を目指しての江戸下向後の暮らしにも、どうも主家藤堂藩の姿が見えてくるようだ。江戸は諸藩の藩邸も集まり外交活動の最重要地である。江戸での住居の斡旋、入門者の紹介、箔を付けるための『貝おほひ』の発刊資金の用立て等々。俳諧だけでは暮らしが立たなかつたのか、神田上水の補修工事にも監督官として携わつたという副業の紹介にも藤堂藩の力が働いていたとしてもおかしくない。関東代官伊奈半十郎家がおそらく裏の就職先ではなからうか？、という興味深い説もある。伊奈家は江戸開府以来二百年に亘つて関東一円の治山、治水工事を担当した名家であり、本所・深川もその支配地であり芭蕉庵があつたところも元船番所跡である。江戸城の工事を担当した藤堂藩とも関係が深いこともあり就職にあたって力添えがあつたのでは？。

ともあれ、延宝三年（一六七五）には、当時その諧謔性で人気があつた談林派とも交わり俳諧師としての腕を上げ、〈桃青〉と名乗り始めた。

【松尾桃青 三十三歳】

延宝四年（一六七六）盛夏六月、伊賀上野へ帰郷の為、小夜の中山を越えた。この時詠んだ句が

〈命なり わずかの笠の 下涼み〉

俳諧師として実力もつけつつあり、三河の地赤坂では〈夏の月御油より出て赤坂や〉の句を残している。旅往く姿も俳諧師らしくなでつけ髪であつたか。まだ談林風の句作が多かつた。この初めての帰郷については、藤堂藩が国元を出た領民に課していた五年目毎の出頭帰郷に従つたことともいう。そうであるなら情報収集の施策として実に巧妙というべきか。又、同年の江戸へ戻るにあたっては甥、（姉の子）にあたる〈桃印〉当時十五六歳を自らの養子とすべく連れ帰り、七月には江戸に帰着した。これがこの旅の大きな狙いだったようだ。何故〈桃印〉を連れてきたのかについては、俳諧師としても忙しくなりつつあつた身の回りを手伝わせる為とか諸説あるが定かではない。又彼は俳諧師となつた訳でもなく何を生業としたのかも定

かでない。桃青は、江戸に帰った後も俳諧点者としての腕も上げつつ、神田上水補修工事監督の仕事もこなして多忙を極めた。延宝五年（一六七六）には俳諧宗匠となり順風満帆かに思えた。

ところが延宝八年（一六八〇）冬、日本橋小田原町での宗匠稼業を突然に止めてしまい、鄙びた深川村へ隠棲してしまう。この時、内縁の妻であった寿貞とその子供達とも別れ、臨川庵の（仏頂）師の元で出家し臨濟宗の僧となった。この後は半僧半俗の人として生きていくことになる。深川では庵に暮らし、（泊船堂桃青）と名乗ったが、やがて庵には弟子の（李下）から贈られた芭蕉が植えられ、それに因み（芭蕉庵）と呼ばれ始めたという。

それにつけてもこの劇的な人生の転換の背景には一体何があったのか？これには諸説がある。曰く、寿貞を巡っての人間関係の纏れがあったとか、商売々せねばならない俳諧点者稼業に嫌気が差して西行達に憬れでの疑似隠遁生活の演出の為だからだ、とかである。後になって「点取りに昼夜を尽し、勝負をあらそひ、道を見ずして走り廻るもの有り」とも書いている。しかし次の説にも頷けるのではなからうか。延宝八年という年は幕府においては將軍が家綱から綱吉への世継ぎ問題があり、芭蕉の主筋に当る藤堂家も政変に巻き込まれ、伊奈家も代替わりがあり、芭蕉自身も裏の稼業を伊奈家から失職させられショックが大きかった？、ということ。旧主良忠の死去に続く挫折に合い、思うところがあり、生き方を大きく転換させたということではないだろうか？これには若い頃から学んできた李白・杜甫・定家・西行を始めとする先達の生き方、臨濟禅、老莊哲学等が大きく影響を与えていたとも思える。この後も芭蕉庵が大火で類焼し、命からがら江戸から甲州へ避難したり、故郷の母の死去等もあり世の無常を感じること多かつた日々が続いた。

【芭蕉庵桃青 四十一歳】

貞享元年（一六八四）初秋八月。墨染めの衣の禅僧として乞食行脚の旅に出ることになり、句を詠んだ

（野ざらしを 心に風の しむ身かな）

いわゆる〈野ざらし紀行〉の旅である。旅の目的は前年に没した亡母の墓参であり、かねて旧知の大垣の〈木因〉（季吟の同門）を尋ねることだった。僧であっても俳諧稼業は忘れた訳ではなく、名古屋では門人獲得の句会にも励んだ。この時同行したのは故郷の大和へ帰る門人の〈千里〉であった。

小夜の中山に差し掛かった時詠んだ句が

〈道のべの 槿は馬に 喰われけり〉

前夜に宿泊したとも思われる金谷宿の長光寺に句碑がある。禅的な味わいがあるとも、観念的で理屈っぽい、と子規からは駄句と酷評されてもいる句である。小夜の中山あたりではもう一句が詠まれた。

〈馬に寝て 残夢月遠し 茶の咽り〉

この句碑は久延寺境内他二箇所にある。杜牧の漢詩の世界を巧みに取り込んだ句とされる。この時の旅は乞食行脚の修行の旅といいつつも、どうやら馬に乗って峠を越えたと思える。故郷からの帰りの旅は 翌、貞享二年（一六八五）四月に大垣、名古屋から木曾路、甲州路を経て戻ったとも東海道經由甲州路を経てとも伝えられ小夜の中山を越えたかどうか定かではない。

【風羅坊芭蕉 四十四歳】

貞享四年（一六八七）晩秋十月。この年、仏頂禅師より嗣法の印可を受け本格的な僧侶としての資格ができ、臨済禅の師家となった。そして彼は尾張・三河に向け旅立つことにした。目的は門人〈杜国〉と吉野で花見をする為であった。江戸からの旅立ちに当っては、饒別の句会を催し詠んだのが

〈旅人と 我が名呼ばれん 初しぐれ〉

この旅には供はなく一人旅であり。後年門人〈乙州〉によって〈笈の小文〉と呼ばれる作品に纏められたが小夜の中山の地での句作はない。但し、翌々年の八月〈おくの細道〉の旅で敦賀の国は〈越の中山〉木目峠を越えた時のこと、小夜の中山を思い出しか西行を偲んでか次の句を詠んでいる。

〈中山や 越路も月は また命〉

尾張までまず行き、そこから名古屋の門人〈越人〉の案内で伊良湖の地に罪人として逼塞していた若く、美男の〈杜国〉を訪ねた。〈杜国〉とは細やかな交情もあり芭蕉最愛の弟子とも云う。世をはばかりながらも翌年伊勢で待ち合わせ、二人して吉野の花見旅を楽しんだ。上方からの帰りは更科での月見をすべく、今度は〈越人〉を共に木曾路から更科、中山道を経て八月下旬江戸に戻った。〈越人〉は後、振られ捨てられ門下を去った。

この時の旅が〈更科紀行〉となつたのであり、東海道は旅しておらず、小夜の中山に芭蕉の姿はない。

【ばせお 四十八歳】

元禄二年（一六八九）春三月からは〈おくの細道〉の旅には当初予定の路通に変えて〈曾良〉を同行した彼は、後に幕府の巡見使となつたことでも明らかかなように幕府の諜報関係それも宗教事情が担当といわれる〈曾良〉はこの時伊達藩による日光東照宮造営工事に伴う内情調査を依頼されていた。芭蕉は〈曾良〉の隠れ蓑となることで幕府にも協力した。旅費も公費が出たので一石二鳥だった。大垣で旅を終えた後は上方に留まり、江戸に戻る迄、伊勢、京都、膳所、大津など 関西方面で多くの門人達と交わりつつ俳諧界の巨匠として活躍、不易流行・わび・さびの蕉風を確立していった。

元禄四年（一六九一）秋十月。〈猿蓑〉では軽みという新境地を提唱し、この秋、江戸へ久方ぶりに戻ることになり大津の義仲寺より従弟の天野〈桃隣〉を伴い旅立った。熱田からは美濃出身の若き門人〈支考〉

も加わったことだった。江戸への下向の事情は、江戸に残っていた甥にして養子の〈桃印〉が労咳に倒れており、その看病もあって〈桃隣〉に助けをもとめたとも。この旅でも小夜の中山での句はないが、大井川を越えた島田宿では

〈馬方は 知らじ時雨の 大井川〉

と詠んでおり大井川の土手に大きな句碑が建てられている。十月中には江戸に帰着したが、深川の芭蕉庵は〈おくの細道〉の旅に出るに際して売却していた。そこで日本橋橋町の彦右衛門店の借家で年を越し、しばらくして〈杉風〉など門人達が建ててくれた深川の新芭蕉庵に転居した。単なる乞食行脚の僧侶でも聖人でもない、とも思えるのだが。

【芭蕉翁 五十一歳 終焉の旅】

元禄七年（一六九四）夏五月。僧形姿に頭陀袋、中には「おくのほそ道」の稿本が入っていた。

前年の三月に長患いで病いに臥せていた〈桃印〉が三十三歳の若さで没した。この死は芭蕉に大きな悲しみを与え、亡き〈桃印〉への鎮魂の想いから五年も前に旅した奥の細道をこの年七月に庵にひと月閉じこもって書き上げていた。この草稿を、能書家である柏村素龍に清書して貰ったものを故郷の兄、半左衛門の元に持ち帰り亡き〈桃印〉への追悼としたのである。従者は〈次郎兵衛〉。芭蕉と寿貞との間にできた子供であり、この時十九歳か。小田原まではあの〈曾良〉も同行した。江戸には〈まさ・おふう〉という妹がいた。妻の寿貞は芭蕉の出家と共に在家のまま出家し寿貞尼となっていたが、桃印亡き後、この時は深川の芭蕉庵に娘達と移り住んでいたが病いがちであったようだ。

旅立ちに当っては多くの門人達が見送りに出て別れを惜しんだ。持病に悩まされ、体力も衰えていたので駕籠に乗り、川崎辺りで駕籠の中から扇に句をしたためて門人達に差し出した。

〈麦の穂を 便りにつかむ 別れ哉〉

この句碑が川崎市八丁畷に今も立つ。大井川の川越は折からの梅雨にたたられ足止めが長引いたが、島田宿の門人達と句会を重ね商売もしたのである。

〈さみだれの 空吹き落とせ 大井川〉

などの句が残っており、島田市内には実に句碑が多いのが目立つ。小夜の中山は急坂でもあり、おそらく馬か駕籠の助けを借りた。気力も衰えていたのか句作も行われてはいない。

この旅では故郷伊賀上野から上方へ、そして門人去来の生地長崎を一度訪ねたかったようでもあるが、とうとう叶えられることはなかった。

六月大津で寿貞尼死去の知らせを聞いた芭蕉は、江戸への手紙で「寿貞無仕合もの、まさ・おふう同じく不仕合、とかく申し尽し難く候」と嘆き、伊賀上野での盂蘭盆会では、

〈数ならぬ 身とな思ひそ 魂祭り〉

との哀悼の句を捧げている。次郎兵衛は母の位牌を伊賀上野へ持ち帰るため一人で東海道を往復した。

寿貞尼は故郷で藤堂藩縁の人達に菩提を弔われており、やはり芭蕉の伊賀上野時代からの繋がりの方であったと思いたい。

九月八日には弟子達の縄張り争いの仲裁の為大坂へ出掛けたが、慢性の胃腸病で弱っていたところに、きのこ汁がよくなかったのか病いに倒れ、十月十二日に、御堂筋の花屋仁右衛門方貸し座敷で逝去。最後の句は、〈旅に病んで夢は枯野をかけめぐる〉ではなく 次の句となった。

〈清滝や 浪に散りこむ 青松葉〉

息子次郎兵衛は芭蕉の死後、江戸の門人達への遺言状・遺品を届ける為下向した。届け先は芭蕉の最も古くからの門人であり生涯のパトロンでもあった日本橋の魚問屋鯉屋（杉風）。彼は幕府御用達の商人でありここでも幕府・藤堂藩を巡る情報網の影が見えてくる。

次郎兵衛は俳諧の道とは無縁の人生を送ったようで（次郎兵衛は何商いぞ秋の風）という句が後世伝えられており、どうやら市井の商人となって江戸の町に埋もれ消えていったようである。娘おふうは（風）まさ（雅）であったか。

芭蕉は晩年の門人（許六）に「東海道の一筋を知らぬ人風雅に覚束なし」と語ったと伝えるが、誠に芭蕉は（風雅の魔人）ではなかったか、と、思えてくる。松尾芭蕉と名乗ったことも、呼ばれたことも生前は一度もなかったのであり、小夜の中山を旅行く毎に、名を変え、姿を変え、供を変え、作風を変えていったのであり、常に一つとところに止まることはなく、西行的隠者生活に慣れ、模倣しつつ、風雅の新しい境地を求め旅を続けていった。彼の思想・行動の根底には「虚に居て実を行う、実に居て虚を行うにはあらず」があった。が、しかし、彼の姿は変幻にしてとらえどころがない。

ある時は、俳諧師、又ある時は禅僧、又ある時は、忍者ではないが、心ならずも藤堂藩の情報探索協力者又ある時はついてこれない門人を次々切り捨てていった冷酷な現実主義者。で、ありながら社交的、活動的で人の気はそらさない気配りの人。衆道好きで、妻子も顧みず旅から旅へと芸術の為と言いつつ漂泊した身勝手者。でありながら、身内の不幸には熱き涙も流した情けあふれる人。ついて行こうと思わせる魅力を持っていた人。志高く風狂の道を歩んだ漂泊の旅人、詩人ではあるが、実は相次ぐ肉親の不幸、門人達の軋轢に悩まされ草臥れ果てていた普通の人でもあった。

あなたの残した風雅の言霊は、三百年以上の永きに亘り東海道を往く人に語りかけ、それどころかこれからも我々の心をつまえて離しそうもありません。芭蕉さん、未だ正体を見せないおぬしは、本当にただものではありませんね。

芭蕉を尊敬して止まなかった〈蕪村〉はこう詠んだ。

〈芭蕉去って そののち いまだ年暮れず〉

(了)

